

# 観光と文化活動による地域の活性化

—岡山県牛窓町の場合—

高 橋 正 明

## 1. はじめに

昨今、「町づくり」、「地域おこし」は様々な方法で日本の各地で実施されている。この運動を日本の開発政策の中に位置づけてみると、まず第三次全国総合開発計画（昭和52年閣議決定）の影響があげられるであろう。すなわち石油危機以降の低成長、資源有限時代のもとで、大都市への人口と産業の集中を抑制し、地方を振興するため水系・流域ごとに定住圏を設定し、人間と自然との調和のとれた居住環境を作り出す構想などが背景となってきた。

さらに第四次全国総合開発計画（昭和62年閣議決定）では多極分散型国土の形成と交流ネットワーク構想を柱とする開発理念を示した。すなわち①定住と交流による地域の活性化、②国際化と世界都市機能の再編成、③安全で質の高い国土環境の整備を基本目標としており、地域格差を単に所得や雇用機会の格差として捉えるのではなく、国民の価値観の多様化を反映するさまざまな空間像を提起している点が注目される。<sup>1)</sup>

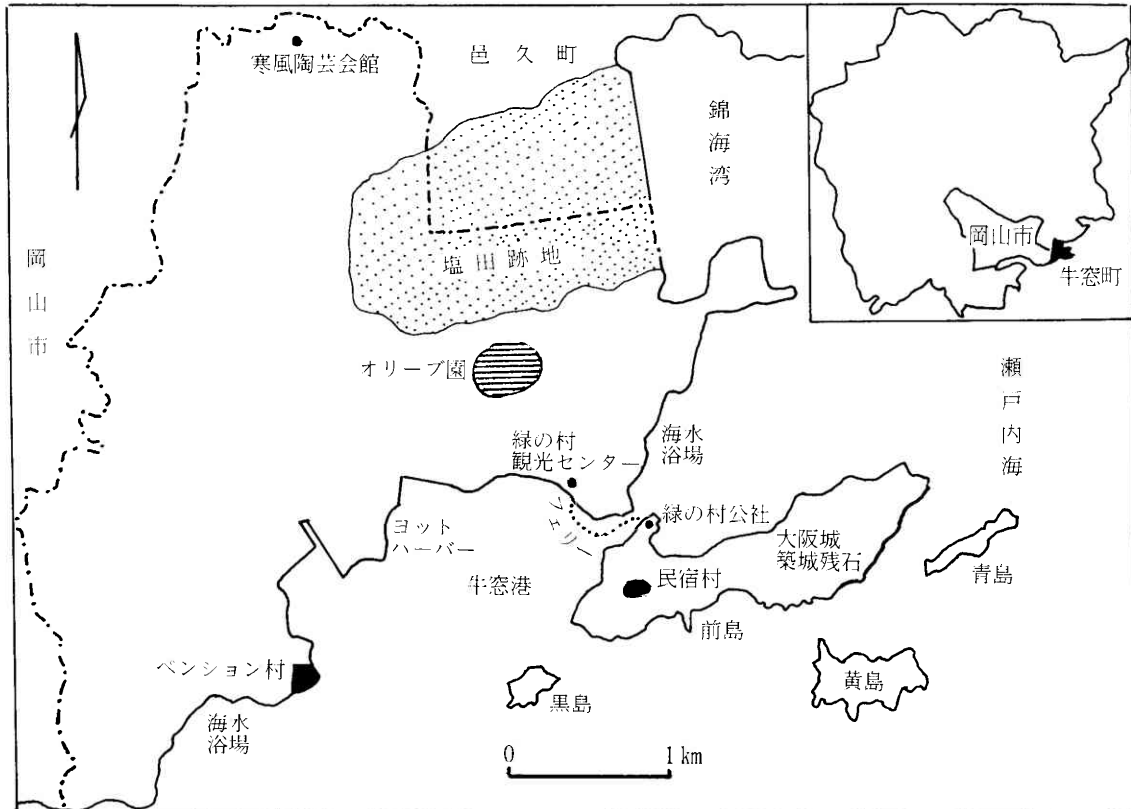
筆者は、これまで農山村の地域の活性化について調査を進めてきたが、<sup>2)</sup>「地域おこし」の具体的な事業については、①個性ある町づくり、美しい景観の創造、特色ある施設づくり（観光振興による地域づくり）、②特産品おこし（1.5次産業による地域づくり）、③シンポジウム・イベント・ふるさと会員制度の実施（都市と農山村の交流による地域づくり）などに区分される。もち論このような事業が各々単独に実施されているのではなく、様々な組み合わせられて実施されており、少しでもユニークな方策を打ち出そうと各地で必死の努力が重ねられている。そして最近ではいわゆる“もの”から“心”へ、“施設”から“内容”へと転換がはかられており、「町づくり」、「地域おこし」は新しい局面を迎えているとも言えよう。<sup>3)</sup>

本稿でとり上げる岡山県牛窓町は“日本のエーゲ海”というキャッチフレーズで、海浜型リゾート地として意欲的な町づくりを進めていることで有名である。しかも、ここでは大型観光資本誘導型ではなく、最初は行政主導型により、そしてその後は、民間の力を結集して町ぐるみの努力によって地域の活性化をはかっていることを特色としている。本論

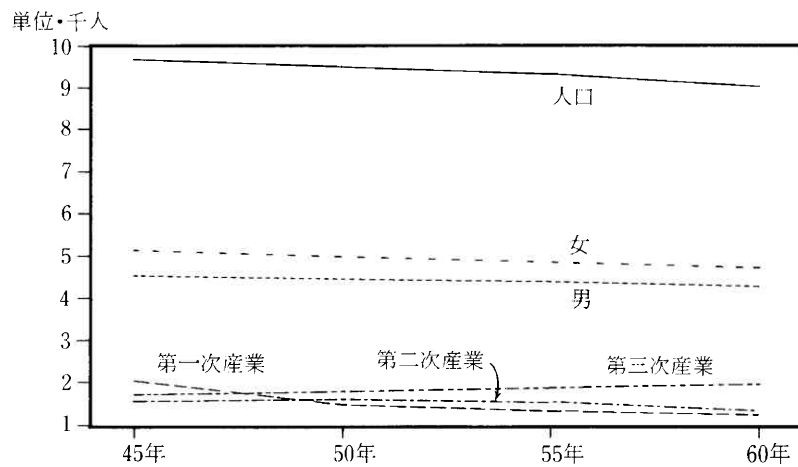
文は筆者の地域活性化の一連の研究の一つとして牛窓町の地域づくりの実践の姿を報告するとともに、今後に残された課題について、若干の検討を加えたものである。

## 2. 農漁村としての牛窓町の特徴

牛窓町は瀬戸内に面する典型的な古い港町であり、岡山市の中心部から東南方向約30kmに位置している。南には唐琴の瀬戸をへだて、前島、黒島などの小島が点在する。この地



第1図 牛窓町地域概念図



第2図 人口及び産業別人口の推移

域が栄えたのは江戸時代であり、大名の参勤交代の御座船の停泊地として、また帆船の潮待ち港として賑わった。また牛窓は廻船を多くつくる船大工の町でもあり、文化・文政期には150人の船大工と300人の小挽がいたという<sup>4)</sup>。ところが交通輸送手段の変化とともに、牛窓は半島上につきでたその地形的制約もあり、戦後の開発からは取り残されていくことになる。人口も徐々に減少し、若者が少なくなる町として、“陸の孤島”と形容される活気の乏しい町となってきたのである（第2図）。

そこで、牛窓町では地域をどのようにして活性化するか、という事が種々論議された。そして、その結論は、①まず世間に牛窓という町をPRし、知名度を高める。②牛窓町にある地場資源を見直す。③地形的条件から観光資源に恵まれている。④農業面では生産性の高い野菜生産が行われている。⑤漁業資源を生かした観光客の誘致、などとなった。そして最終的には牛窓町の果す役割として、“これらの諸資源を生かした大都市の人々との交流”による地域の振興がはかれることになったのである。そしてこの場合、観光+1.5次産業による地域開発が行われることになった次第である。

ここで、牛窓町の概要についてふれておきたい。牛窓は瀬戸内型気候で比較的乾燥しており、昭和14年頃よりオリーブの栽培が行われ、観光資源として利用されるとともに、化粧品メーカーの日本オリーブは全国的な地位を築きつつある。しかし牛窓は基本的には農業と漁業を中心とした町であり、ここではその内、特に農業について記しておきたい。第1表に示したのは岡山市広域市町村圏区域に属する20の市町村の農業生産力に関係あると思われる指標を6つ選び、標準得点を示したものである。標準得点は次の式で算出される。<sup>5)</sup>

$$Z = \frac{X_i - \bar{X}}{S}$$

ただしSは標準偏差、 $X_i$ は各々の市町村における原データ、 $\bar{X}$ は平均値である。牛窓町は①児島湾の干拓地で有名な灘崎町と並び、飛び抜けて標準得点が高い。②農家1戸当り生産農業所得も得点3.34で圏内第1位。③500万円以上農産物販売農家率も3.30の得点を示し、非常に高い所得をあげている。④その他に耕地利用率も比較的高くなっており、マイナス指標を示すものは老年化指数だけである。

要するに、牛窓町は、生産の担い手に問題点を残すものの、農業の面では非常に裕福な町であることがわかるのである。このことは土地生産性と労働生産性の2指標を示した第3図からも明らかであり、とくに土地生産性の高さは、特筆に値する。

ところで、牛窓町は海岸線に沿って町並が発達しているが、その裏には標高166.9mの阿弥陀山を最高とする小丘陵が並び、平地に乏しい。これがため、水田は少く、100~150mの丘陵上に段々畑が展開している。牛窓町の水田率は27.5%（岡山県平均は78.1%）でしかなく、同じく生産力の高い灘崎町の水田率96.2%と好対照を示している。第2表は農業粗生産額の内訳を修正Weaver法により示したものである。<sup>6)</sup>その算出方法は次の通りである。

第1表 農業生産力の標準得点と市町村別順位

	農業を 主とする 農家率	生産農業 所得/戸	500万円 以上販売 農家率	1戸当 経営耕地	耕地利用率	老年化指数	総合得点	順位
岡山市	0.06	-0.01	-0.12	0.65	0.19	0.18	0.94	5
倉敷市	-0.94	-0.66	-0.38	-1.27	-0.39	0.41	-3.22	19
玉野市	-0.37	-0.53	-0.28	-1.05	0.25	-0.15	-2.12	13
総社市	-0.69	-0.48	-0.47	-0.65	-0.39	0.70	-1.96	12
御津町	-0.39	-0.72	-0.26	-0.65	-0.21	-0.90	-3.12	18
建部町	-0.24	-0.49	-0.40	0.14	-0.46	-0.98	-2.43	15
加茂川町	1.24	-0.14	-0.22	0.33	-0.28	-3.07	-2.14	14
瀬戸町	-0.22	-0.57	-0.61	-0.25	-0.35	-0.45	-2.45	16
山陽町	0.93	0.28	-0.22	0.70	-0.95	0.32	1.05	4
赤坂町	-0.27	-0.29	-0.47	0.53	-0.66	-0.37	-1.52	11
牛窓町	2.89	3.42	3.38	0.90	1.60	-0.96	11.23	①
邑久町	0.76	-0.09	0.06	1.03	0.11	-0.19	1.68	3
長船町	-0.89	-0.21	-0.36	0.92	0.39	-0.64	-0.79	9
灘崎町	0.98	1.86	1.97	2.58	2.39	1.38	11.15	2
早島町	-1.49	-0.65	-0.66	0.45	-0.43	1.28	-1.51	10
山手村	0.12	0.34	-0.12	-0.19	-0.58	1.17	0.74	7
清音村	-0.87	-0.57	-0.82	-0.64	2.44	0.80	0.34	8
船穂町	0.91	0.89	1.16	-1.15	-1.29	0.41	0.93	6
金光町	-0.54	-0.77	-0.58	-1.87	-1.07	0.53	-4.29	20
真備町	-0.99	-0.61	-0.59	-0.50	-0.31	0.53	-2.48	17

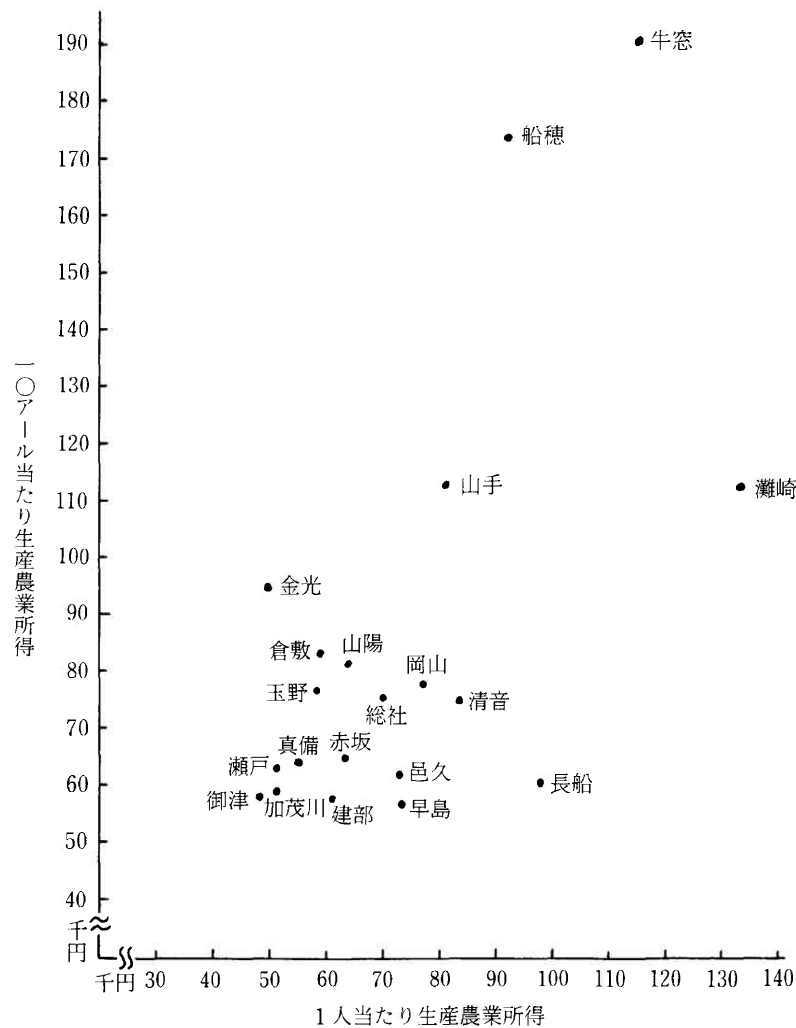
(農林業センサス1985年, 生産農業所得統計60年より算出)

$$C.I. = \sum d^2 = \sum (X_i - \bar{X})^2$$

ただし、C.I.は組み合わせ指数、各市町村の作物の比率 ( $X_i$ ) と理論値 ( $\bar{X}$ ) の間の偏差 ( $d$ ) を出し、その偏差の平方の和が最小のものがその地域の組み合わせとなる。ほとんどの市町村がR+その他の組み合わせをとる場合が多いのに対して、牛窓町はV・Dと、特に野菜の占める割合が高くなっており、R(米)の比率は極端に小さく、組み合わせには現われてこない。

このように牛窓町は国の野菜指定産地として、馬鈴薯・白菜・キャベツなどの生産で高い所得をあげているが、重量野菜であることと、担い手の高齢化と婦女子化に伴い、これからは転換を迫られることもまた事実である。また、第1次産業中心の産業構造の变革を求めて、「地域おこし」運動が展開され出したのもある。ところで牛窓町民は今後の産業の発展についてどのように考えているのであろうか。昭和52年と58年のアンケート調査によれば、「観光・レクリエーション中心に発展」するべきであるとする人々が多く、現状からの脱却を望む声が増えてきている(第4図)。

観光と文化活動による地域の活性化



第3図 土地生産性と労働生産性  
(岡山県南広域市町村圏に属する市町村)  
出所：生産農業所得統計60年

### 3. 補助事業の活用による町づくりの推進

#### (1) 緑の村整備事業と前島の開発

牛窓町の開発のきっかけとなったものは、農林水産省の農村地域農業構造改善事業（自然活用型）の導入である。この自然活用型は新農業構造改善事業の一環として、①学童・都市生活者等への農業・農村の役割に対する理解を深める機会及び健全な余暇活動の場の提供、②農業者等の就業機会の増大、③農家経済の安定向上、などを目的に進められているものである。

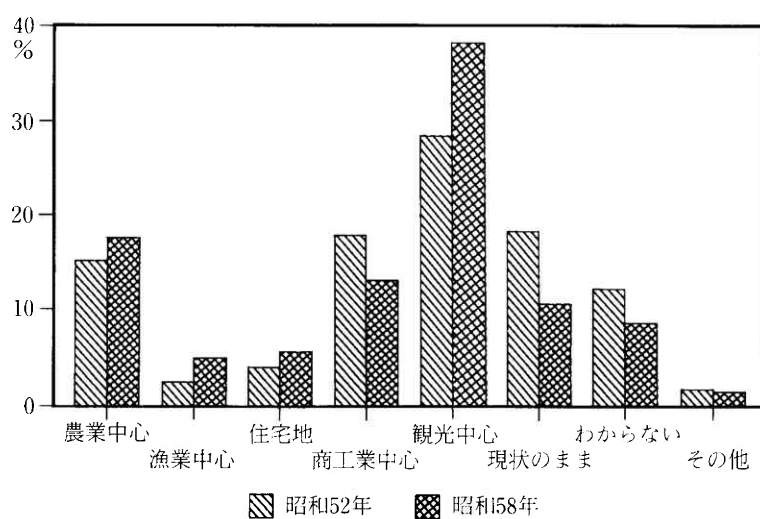
牛窓町では、昭和54年から総事業費3.2億円（その内国庫補助金1.6億円）で「緑の村整備事業」が実施された。これは大阪城築城の残石群の跡地で有名な前島（81世帯、人口302人）を開発しようとするもので、事業は土地基盤整備と地域環境整備の2つからなる（第3表）。前者は前島のグリーンロード、遊歩道の新設、観光農園に通ずる連絡農道の改築な

観光と文化活動による地域の活性化

第2表 修正Weaver法による農業地域区分

	計	米	野菜	果実	乳牛	鶏	麦・苗木 工芸作物	その他	農業経営 区分
岡山市	100.0%	48.7	14.3	12.1	8.4	5.8	5.4	5.3	R・V・F
倉敷市	100.0	36.6	19.7	10.9	8.1	13.5	3.0	8.3	R・V・C・F
玉野市	100.0	43.2	28.9	6.6	6.4	1.3	6.0	7.8	R・V
総社市	100.0	42.4	12.3	16.2	2.6	12.7	4.7	9.1	R・F・C・V
御津町	100.0	50.1	7.6	13.6	9.2	11.0	0.0	8.6	R・F・C
建部町	100.0	45.4	5.3	4.1	31.6	3.8	0.0	9.8	R・D
加茂川町	100.0	33.6	7.4	8.2	17.3	13.2	13.6	6.7	R・D・T・C
瀬戸町	100.0	57.3	10.7	20.7	2.0	0.9	0.0	8.4	R・F
山陽町	100.0	38.1	6.8	28.3	5.7	9.5	6.5	5.2	R・F
赤坂町	100.0	52.7	14.9	14.7	1.1	8.3	0.0	8.3	R・V・F
牛窓町	100.0	2.9	55.9	0.3	35.6	0.0	0.0	5.2	V・D
邑久町	100.0	47.0	7.8	8.2	18.0	6.0	4.4	8.5	R・D
長船町	100.0	57.5	4.6	0.9	22.3	0.0	5.8	9.0	R・D
灘崎町	100.0	36.4	35.7	1.3	2.7	7.7	14.5	1.6	R・V
早島町	100.0	74.2	11.3	8.0	0.0	0.0	0.0	6.5	R
山手村	100.0	36.3	40.5	19.5	1.0	0.0	0.0	2.6	V・R・F
清音村	100.0	55.8	15.7	1.7	3.1	1.1	17.6	5.0	R・W・V
船穂町	100.0	11.4	21.5	60.6	0.6	0.0	0.0	5.9	F・V
金光町	100.0	22.8	11.3	13.9	14.8	22.1	9.9	5.1	R・C・D・F・V・P
真備町	100.0	39.4	12.7	13.6	1.9	25.3	0.0	7.0	R・C・F・V

(注) R-米, V-野菜, F-果物, C-鶏, D-乳牛, T-工芸作物, W-麦, P-苗木  
(農業所得統計60年より算出)



第4図 牛窓町民が考える産業の発展方向  
(『牛窓町振興計画』昭和58年、P30)

第3表 緑の村整備事業の概要

事業区分	事業主体	内 容	事 業 量	事 業 費	実施年度
土地基盤整備	牛窓町	連絡農道整備	6,289m	170,550千円	昭54-55年度
地 域 環 境 整 備 事 業	牛窓町	郷土文化保存伝習施設 (緑の村センター)	1棟 155.27m <sup>2</sup>	14,280	55
		野外緑地広場施設	5カ所 9,100m <sup>2</sup>	6,520	55
		野外緑地広場附帯施設	1棟 18.6m <sup>2</sup>	1,850	56
	牛窓緑の村 農園組合	林間休養施設 (キャンプ場)	1カ所 2,000m <sup>2</sup>	2,500	55
		運動広場施設 (テニスコート)	2カ所 1,400m <sup>2</sup>	10,000	55
		観光農業園地等管理施設	1棟 53.94m <sup>2</sup>	3,000	56
	鹿歩山農園 組合	観光農業園地等管理施設	1棟 202.69m <sup>2</sup>	21,152	56
	牛窓町緑の 村公社	公社管理事務所	1棟 183.5m <sup>2</sup>	25,648	56
	牛窓緑の村 農園組合	学童農園, 体験農園施設	4カ所 20,000m <sup>2</sup>	72	56
鹿歩山農園 組合	体験農園施設	1カ所 20,000m <sup>2</sup>	228	56	
牛窓町緑の 村公社	農産物運搬船(フェリー)	1隻 72.94 t	62,200	56	
合 計				321,000	

(産業課資料による)

ど、主として道路の整備にあてられた。一方地域環境の整備としては、牛窓町の本土側に緑の村観光センター、鹿歩山農園組合の管理センター、前島側に緑の村管理事務所、キャンプ場、テニスコートなど観光農園やレジャー関係の諸施設が整備された。

この事業では、とくに本土側と前島の連絡を密にするために、農産物運搬船の名目で73 tの新型フェリーが30分毎に運行されるようになった。従来は、フェリーは前島の有限会社が経営していたが、これを機会に、島の住民と町で構成される「牛窓町緑の村公社」を作り、責任体制が強化されるとともに、輸送力の増強が図られることになった。なお、その後、フェリーは62年4月に200 tの船が就航しており、現在ではこれが主力となっている。

なお岡山県には、牛窓町の他に、草間自然休養村(新見市)、城北自然休養村(勝山町)、富自然休養村(富村)、松山自然休養村(高梁市)、東粟倉自然活用村(東粟倉村)などの自然と緑の村がある。

## (2) 農村地域定住促進対策事業と本土の開発

前島の開発に対して、本土側の事業としては「農村地域定住促進対策事業」がある。これは昭和57年度から始まったもので、事業の目的は牛窓町の定住人口をもっと増加させる

観光と文化活動による地域の活性化

ために、就業の場所の創出、それに必要な施設を整備しようとするものである。総事業費2.4億円で集落集会施設、農協にコンピューター設置、寒風陶芸会館の建設ならびにそれへの進入路の新設、改良などの諸事業が行われた（第4表）。

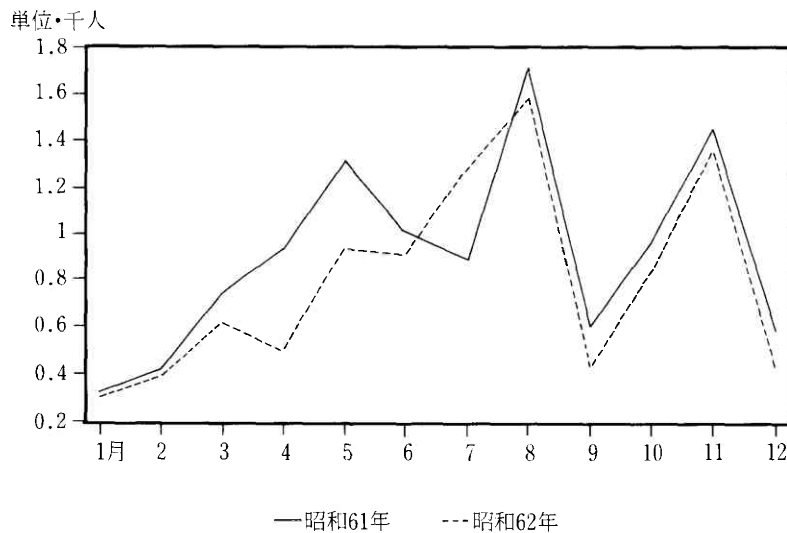
第4表 農村地域定住促進対策事業の内容

内 容	主 体	事 業 量	事 業 費	実 施 年 度
農道(改良・舗装)	牛窓町	L=1,843.6m W=4.0~5.0	98,828千円	昭60-62年度
集出荷施設	長浜農協	1棟 112m <sup>2</sup>	6,200	63
共同作業施設	〃	1棟 168m <sup>2</sup>	12,422	63
電 算 機	〃	1台	11,900	58
集落集会施設	牛窓町	1棟 81m <sup>2</sup>	11,000	59
寒風陶芸会館	〃	1棟 529m <sup>2</sup>	91,330	59-60

(産業課の資料による)

この事業の中心をなすものは寒風陶芸会館であり、岡山県と牛窓町、そして民間による財団法人により運営されている。ことに岡山県では、「東瀬戸内海洋レクリエーション基地推進」を旨として、牛窓町に建設される陶芸会館の整備事業費の一部を補助している（昭和59~60年度で約1,400万円）。

牛窓町の寒風一帯では、飛鳥時代から奈良・平安時代にかけて、須恵器をはじめ鷗尾などが焼かれていた古窯群跡で、現在の備前焼のルーツと言われている<sup>7)</sup>。昭和61年には国の重要史跡に指定された。寒風会館の資料展示室には、時実黙水氏が収集した寒風一帯からの出土品（いわゆる時実コレクション）を中心に、古代須恵器の展示ならびに焼物の歴史



第5図 寒風陶芸会館入場者数 (会館資料より作成)



的推移が見学できるようになっている。会館の周辺には作家の工房があり、全長50mをこえる日本一の登り窯が造られており、話題性をも提供している。

昭和60年9月に完成したこの会館は、61年10,961人、62年には9,570人の入館者があった(第5図)。1日平均にすると約30人という事になる。12～3月の来館客が少いようであるが、今後は、ペンションなど宿泊施設と連携した、より効果的なPRが必要とされるものと思われる。

### (3) 日本で唯一の海浜型ペンション村の形成

「緑の村整備事業」と時を同じくして、牛窓町当局は、若者が滞在する町として、ペンション村を形成することを考えた。そこで牛窓町は、日本ペンション協会にペンション誘致の話を持ちこんだのである。そして昭和54年に、町は瀬戸内海を眺望できる鹿忍地区の丘陵上の土地を用意した。この土地は、日本列島改造の時に阪神電鉄が買い占めていたものであったが、ペンション協会がこれを譲り受け、分譲したものである。ペンション協会が大阪に事務所を構えていたことから、京阪神を中心にオーナーを募ったところ、京都市から2名のオーナーが応募し、54年6月に第1号のペンションがオープンしたのである。

ここで少しペンションの概要について述べることにしよう<sup>8)</sup>。日本で最初にペンションが登場したのは群馬県の綿貫ペンションであるが、それ以降急速に成長し、現在では長野県を中心に約2,500軒のペンションが立地している。ペンションを我が国に普及させてきたペンション・システム・ディベロップメント株式会社(P.S.D)が不動産業と間違れるのを防ぐため、創業後(昭和48年設立)4年間は地方公共団体が誘致する地域でしか土地を斡旋しなかったこともあって、我が国に導入された初期のペンションの大半は長野県や新潟県などの高原に立地し、沿海部のペンションは極めて少数にとどまっていた。沿海部の地価の高さは、同時にこれらの地域では適地が非常に少いこともあり、新規開業希望者は多いにもかかわらず低調であり、伊豆半島にみられるように、海を望んだ伊豆で土地を探し、逆に海沿いでなく高原で、はるかかなたに海を見る立地で開業というようなケースが続出してきたのである。

このようなペンションの立地動向の中であって、全国でも唯一の海浜型の本格的なペンションが誕生したことは、牛窓町の観光発展にとって誠に幸運なことであったと言えよう。牛窓のペンションはその後着々と増加し、56年には9戸のペンション村が形成された。ペンションのオーナーはほとんどが京阪神の出身者であり、年齢は30歳代が中心であった。様々の経歴をもった人々が、脱サラ、脱都会、趣味と実益を兼ねた人生を求めて、未知の牛窓町でペンション経営に乗り出したのである。昭和63年にはペンションは18軒に増加し、量的には順調な伸びを示しているように見える。

しかしながら、ペンションの開設から1～2年間は、宿泊者はほとんどなく、土曜日以外は開店休業の状態であった。経営状態は極度に悪化したと言われる。ほとんどのオーナ

## 観光と文化活動による地域の活性化

ーは2,000～3,000万円の借金をかかえていたので、平日は土木作業員として日稼ぎの仕事に従事した。民宿の経営者のように農・漁業を兼ねている訳ではないし、土地・建物のすべてを購入して開業するペンション経営者は苦難に直面した。あるオーナーからの聞き取りによれば、ローンの支払いが精一杯で、年金も払えず、免除の申請をしたと言う。また小学校に通う子供の給食費の支払いにも事欠くあり様であった。

このような状況の下に、牛窓町当局は、ペンション誘致の一方の当事者でもあり、観光客誘致のために、牛窓町の名前を売りこむべく、様々なイベント作戦を展開したのである（この詳細については後述する）。その結果、徐々に宿泊者数は増加し、現在ではペンション経営は一応軌道に乗り、本格的な展開を示すようになったのである。

そこで次に、牛窓町で行われている様々なイベントについてふれておこう。

第5表 牛窓町における町づくりの概要

	主 要 項 目	宿 泊 施 設	ス ポー ツ 関 係 イ ベ ン ト
昭54年	・緑の村整備事業（前島の開発） （自然活用型農業構造改善事業）	・ペンション 第1号完成	
56		・ペンション 村誕生	・瀬戸内サイクルロードレース ・サイクリングセンチュリーラン ・牛窓カップウィンドサーフィン大会 ・牛窓カップハンググライダー大会
57	・農村地域定住促進対策事業 （本土側の開発） ・ギリシャのミティリニ市と姉妹都市提携 ・ふるさと村うしまど会発足		・牛窓カップヨットレース大会
58		・第1回ペン ション村祭	・ウィンドサーフィンコンテスト
59	・第1回 JAPAN牛窓国際芸術祭 ・ギリシャセミナー	・第2回ペン ション村祭	
60	・第2回 JAPAN牛窓国際芸術祭 第1回ピエンナーレ ・寒風陶芸の里	・牛窓ホテル開設 ・第3回ペン ション村祭	
61	・第3回 JAPAN牛窓国際芸術祭 ・ギリシャセミナー	・第4回ペン ション村祭	
62	・第4回 JAPAN牛窓国際芸術祭 第2回ピエンナーレ	・第5回ペン ション村祭	

(注) スポーツ関係イベントは毎年継続的に行われている。(役場資料と聞き取りにより作成)

## 4. 町づくりとイベントの展開

### (1) ギリシャの都市との姉妹都市提携の成立

牛窓町の名前を世間に売り出すために、一番効果的な方法は何か。町当局はギリシャのエーゲ海に浮かぶレスボスLesvos島のミティリニMitilini市と姉妹都市縁組を結ぶことを考えた。牛窓町は青いオリーブ、美しい島々と海に形容されるように、ギリシャのエーゲ海とその景観が類似していたことから、縁組はとんとん拍子に成立し、昭和57年7月ミティ

リニ市において調印式が行われた。日本でギリシャの都市と姉妹都市提携をしたのは牛窓町が最初であったことから、マスコミが大々的にこの調印式をとり上げ、牛窓町の知名度は飛躍的に向上することになったのである。なお、第6表は日本の市町村と外国の交流例を示したものであるが、意欲的な取組みが各地で行われつつある。

第6表 農山漁村における国際交流事例

市町村名	交流先	交流の内容
新潟県 両津市 津南市 聖籠町 朝日村 黒川村 笹神村 大和村 牧村	アラブ首長国連邦	<ul style="list-style-type: none"> <li>昭和51年1月、過疎山村の6町村が連合し、「ニイガタ首長国連邦」を建国(その後、平地農村の聖籠町と佐渡島の両津市が参加)、都市との交流を推進。</li> <li>昭和61年8月、アラブ首長国連邦の駐日大使が聖籠町等を訪問、様々なイベントを行い交流。昭和61年12月、親善使節団を結成、農林水産物加工品等ふるさと産品を携え、アラブ首長国連邦を訪問する等国際交流を推進中。</li> </ul>
富山県 利賀村	ギリシャ デルフィ市	<ul style="list-style-type: none"> <li>過疎対策事業として、村の豊かな自然の活用と文化遺産である合掌家屋の保存整備を意図して、合掌文化村を整備。これを拠点として、都市との交流や文化人等との交流を促進。</li> <li>昭和57年から世界演劇祭(その後、ジャンルを広げ、世界芸術祭)を開催。毎年、10日間余りの期間中に約1万人の観客が訪れる。また、国際演劇夏季大学を開催、約1カ月にわたって世界各国の俳優、演劇者等30~40人が集まる。村では、英会話セミナーも開講。</li> <li>昭和61年ギリシャのデルフィ市と、双方とも世界演劇祭を開催していることを契機に姉妹都市盟約を締結し、国際交流を推進中。</li> </ul>
大分県 大山町	イスラエル メギド町	<ul style="list-style-type: none"> <li>イスラエルのメギド町と姉妹町関係を結び、昭和44年から毎年、町費で3~4人の青年をイスラエルの集団農場(キブツ)に派遣、4カ月の研修をさせ、その合理的な共同生活の体験を町づくりに生かしている。また、こうした運動の中から「世界を知ろう会」など若者たちの自主的なグループが生まれ、海外研修等を実施中。</li> </ul>
鹿児島県 大隅地域	アジア諸国	<ul style="list-style-type: none"> <li>鹿屋市に本部を置く南方圏交流センターの主催で昭和57年から「からいも交流」をスタート、毎年約100人の在日留学生を2週間の日程で地域住民の家に迎え、友好を深める地域ぐるみの手づくりの国際交流を推進中。また、昭和60年3月にはアジアの地域リーダーを招いて「第1回からいも交流アジア会議」を開催。</li> </ul>

(国土庁計画・調整局四全総研究会編『第四次総合開発計画』時事通信社、P189より引用)

## (2) ふるさとうしまど会の発足

昭和57年8月、牛窓町は「ふるさとうしまど会」と称する特別村民制度を実施した。岡山県では、現在24の市町村が同制度を実施しているが<sup>9)</sup>、最も歴史の古いのが昭和52年の越畑ふるさと村(鏡野町)であり、牛窓町は比較的新しい村民制度として発足した。「うしまど会」の事務局は役場内の観光協会におかれている。

会員には次のような特典がある。①ふるさとの便り…定期的にふるさとのカレンダー、レジャー情報などを送るとともに、会員相互の情報交換の場としても活用。②ふるさと特産物…特別会員に限り、年2回以上ふるさと特産物を送る。③各種料金等の割引…④宿泊料金(基本料金の10%割引、以下同じ)、⑤島めぐり観光船、⑥潮干狩料金、⑦海水浴場施

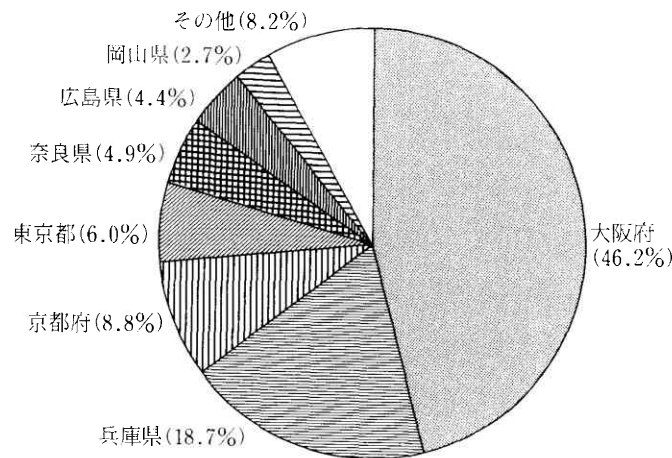
設利用料金，㊦鹿歩山農園組合管理センター，㊧テニスコート料金，㊨飲食料金（うしまど会協力店に限る），㊩宿泊料金，㊪町施設の利用…スポーツ施設等が町民並に利用できる。㊫ふるさとうしまど会の企画に参加できる，などである。

うしまど会の発足当時は，会員は特別会員（会費10,000円）と一般会員（2,000円）に分かれていたが，現在では特別会員のみになっている。会の発足当時，特別会員は500世帯（ふるさと特産物と会報が送られる），一般会員は300世帯（会報だけで特産物は送られない）いたが，昭和62年度には特別会員が184世帯となっている。

では，会員にはどのような特産物が送り届けられるのであろうか。昭和62年度の場合，10月にはオリーブ製品（サラダオイル）とバスオリーブ（入浴剤），1月にはカキ，ノリ，ママカリ，6月には馬鈴薯，カボチャ，ミニトマト，生醤油などとなっている。

ところで，全国で実施されている特別村民制度の場合，会員は当該市町村の出身者が多い。しかし，牛窓町の場合はほとんどが他府県の人々である。いま，昭和地62年度の会員の居住地域別内訳を示すと，大阪府が圧倒的に多く46%を占める。以下，兵庫・京都と続くが，この3府県だけで実に73.6%の会員を集めているのである。その意味では，京阪神の人々を牛窓町に引きつけようとする方法の一つとして，特別村民制度は大きな効果を発揮しているものと言えよう。ただし，前述のように，特別村民制度が始まって4年目の62年度には会員数が減少してきており，制度の見直しが迫られていることも，また事実である。そこで，次に特別村民制度の会員が減少した理由について考えてみよう。

- ①全国的に特別村民制度が普及した結果，昭和60年度には約300市町村がこれに類似した事業を行っており，各市町村間の競争が激化したこと。
- ②牛窓町は海と畑の双方の産物があるが，オリーブ以外は重量野菜しかなく，特産物としての魅力に乏しい点が無きにしもあらずである。



第6図 ふるさとうしまど会員の居住地域別内訳  
（産業課資料より作成）

③特別村民制度そのものに対する取り組み方の問題も一因としてあげられよう。観光協会が事務局となっているが、この制度を発展させていく意気込みに少し欠けるように感じられる。筆者がこれまで調査した兵庫県但東町、岡山県鏡野町、などの場合と比較すると組織・体制などの面において、充実感が乏しいように感じられるのである。

### (3) スポーツイベントの展開

海浜リゾート型のペンション村の誕生に合わせ、瀬戸内の海を生かした若者向けのイベントが是非とも必要となってきた。牛窓では従来より、ウィンドサーフィン、ヨットなどを個々に楽しむ若者やオリーブ園を利用してハンググライダーに興ずる人々がいたが、町当局はそれに相乗りする形で、各種のイベントを打出していった。すなわち町・観光協会・商工会等で実行委員会を作り、各大会を組織化し、町のイベントとして定着化を図ったのである。

第7表に示したのはイベントの概要である。5月～12月にかけて、盛り沢山のスポーツ行事が組み込まれていることがわかる。この中で、牛窓カップヨットレース大会は、ペンションのオーナーにヨットの好きな人がいて始めたものである。また牛窓カップハンググライダー大会はオリーブ園の頂上にランチャー台を観光協会が作り、そこから錦海塩田の跡地と向って舞い上るものである。なお県営のヨットハーバーが62年の7月に一部オープンし、継続工事中であるが完成後には、西日本一の規模を有するものとなり、レジャー基地としての大きな期待がよせられている。

## 5. 文化と芸術による格調高い町づくり

以上のようなスポーツ大会のほかに、牛窓町では文化の町としてギリシャ・セミナーとJAPAN牛窓国際芸術祭を開催している。まずギリシャ・セミナーは牛窓国際友好都市協議会、日本ギリシャ協会の主催で昭和59年より8月に隔年で実施されている。これは古代ギリシャ文明をはじめ、参加者にギリシャに対する理解を深めてもらうためのセミナーである。昭和59年のセミナーには750人の参加者があった。

牛窓町で最大のイベントはやはりJAPAN牛窓国際芸術祭であろう。昭和62年の国際芸術祭の案内書からその目的をさぐってみよう。「古代ギリシャの例にあるように、文化と芸術をはぐくんだのは母なる海と温暖な自然の恵みであった。幸いにも牛窓は地中海のような地形と豊かさに恵まれた海とオリーブの中にあり、古い街並の温存、この地の持つ伝統(例えば須恵器の発祥地)など、多くの歴史をあわせもつ全国でもまれにみる良域の一つであります。…“文化と芸術”の地方での活性化が求められているいま牛窓はこの特異な地理的条件を利用して、いち地方都市とはいえ、国際的なひろがりをつくり出していくことを目指すものとし、それは十分に可能なことと信じます。…このようなことはスペインのビルバオや、ドイツのカッセルという小さな町で行われていて、それによって世界的に有名な

第7表 牛窓町で開催されるイベント

	イベント名	開催時期	主催者	参加者数	イベントの内容
ス	瀬戸内サイクルロードレース大会	5月中旬～7月上旬	岡山県サイクリング協会	100～150人	前島グリーンロード（1周5.5km）を使用して実施。
	サイクリングセンチュリーラン	9月上旬	日本サイクリング協会 岡山県サイクリング協会	100～150人	鳥取～牛窓160kmのロードレース。
ホ	牛窓カップウインドサーフィン大会	7月第1日曜日	実行委員会 (町・観光協会・商工会等)	100～150人	海水浴場開きの日に、西脇海水浴場で開催。
	ウインドサーフィンコンテスト	9月下旬 (不定期)	同上	100～150人	夏のシーズンの終わりに、西脇海水浴場で行う。
ツ	牛窓ヨットレース大会	5月中旬 (不定期)	ヨット愛好者有志	20～30艇 (100～150人)	県内のヨット愛好者を中心に牛窓港沖一帯で行う。
	牛窓カップヨットレース大会	9月下旬	実行委員会 (町・観光協会・商工会等)	30～40艇 (150～200人)	瀬戸内海一帯のヨットマンの参加により牛窓港沖一帯で開催。
	牛窓カップハンググライダー大会	12月～1月	同上	30～40機	オリーブ園頂上のランチャー台から錦海塩田跡地に向けて飛び出す。
	牛窓トライアスロン全国大会	9月中旬	同上	200人 (観客500人)	前島全島を使い、正規の8分の1程度のスケールで実施。
ま つ り	牛窓港まつり	8月第1土曜日	牛窓町・牛窓町商工会 牛窓町観光協会	7000～8000人	牛窓港一帯で行う恒例の夏の風物詩。
	牛窓ふるさと秋まつり	10月第4日曜日	各町内会	2000～3000人	牛窓神社の秋の祭礼行事。
	牛窓ハンション村まつり	10月上旬	ハンションオーナーズ会	300～400人	ハンション年1回の感謝デー。
芸 術 ・ 文 化	ギリシャ・セミナー	8月(隔年)	牛窓国際友好都市協議会 日本ギリシャ協会	200～300人	古代ギリシャ文明をはじめ、ギリシャについての理解を深めるセミナー。
	JAPAN牛窓国際芸術祭	11月上旬	実行委員会 (町・各種団体・民間企業)	4000～6000人	現代美術を核とした国際的芸術祭。

(産業課資料による)

観光地となっています。…そのためには内外よりいろいろな人を招き、種々シンポジウムや展覧会など創造性豊かな企画によって、国際的なコミュニケーションを計りながら、牛窓町の活性化をはかる一つの試みとして、質の高い息の長い、積み重ねで実現していくことが必要であります。』

次に「JAPAN牛窓国際芸術祭」の特性についてふれておこう。<sup>10)</sup>

- ①現代美術を中心とした総合的な国際芸術祭とする。
- ②日本で初めての試みである国際芸術誕生の地牛窓が元来有している豊かな文化、オリーブと海の町を広く知らしめ、町制30年記念の歴史を更にイメージアップし、内外の発展に寄与する。
- ③第1期を10年間の計画とし、長期的な視野で地道な成果を積み重ねていく。
- ④レベルの維持、各分野の水準を画期的に拡げる契機。
- ⑤シンポジウムと小さなイベントは毎年開催とし、特に地元の人々の参加し易いプランを取り入れる。
- ⑥国際現代美術展（大きなイベント）は隔年開催（ビエンナーレ）とする。

さて第1回目は昭和59年の11月に行われ、“地方の文化”についてシンポジウムがオーリーブ園内のローマの丘で開催された。その時の講師には池田真寿夫、乾田明、赤瀬川原平などが招かれた。

第2回目は昭和60年11月に「ビエンナーレ第1回国際美術展」が開かれフランスのダニエル・ビュラン、小杉成久などパフォーマンスアートの先駆者達の作品が展示された。国内はもとより、海外での反響は著しいものがあったと言う。またシンポジウムは「映像」の分野をテーマにアメリカのビデオ・ディレクター、カール・レフラー、篠山紀信などが出席した。

第4回目は昭和62年11月1日～3日にかけて「第2回ビエンナーレ」が「彫刻と空間」をテーマにジョエル・シャピロ（アメリカ）、ジュゼッペ・ペノーネ（イタリア）、村岡三郎、菅木志雄の各氏の作品がオーリーブ園、東服部家蔵、旧中国銀行で展示された。「彫刻と空間」については、国際芸術祭の案内書には次の様に説明されている。「このふたつの側面をともに包括しうるコンセプトとして、空間のひろがりや彫刻のかかわり、逆から言うと、彫刻という形式がその伝統的枠組から逸脱して空間に広がっていく様子、その点を把握してみれば、現代の造形表現のひとつの核心に近付きうるはずである。」筆者も展示物を見学する機会を得たが非常に格調高いという印象を受けた。

昭和62年のもう一つの催しは「牛窓と文化—将来への展望—」をテーマとするシンポジウムである。すなわち、牛窓の歴史と現状をふまえて、地域振興のあり方、自然および文化的遺産の保存と活性化をめぐる論議が展開された。シンポジウムのパネリストとして、針生一郎、中沢新一、若葉みどり、池田満寿夫、西江雅之、小田嶋悟郎などが参加した。各パネリストから牛窓の開発のあり方について、①牛窓がレジャーランド化してしまうことへの危惧、②伝統的な建築群など町並保存のあり方、③人が集まり楽しむ町として牛窓町にすでにあるものを意義づける必要がある。④田舎町を生かした開発のあり方として、芸術家村を町に誘致する案。⑤環瀬戸内文化構想。⑥情報量の乏しさの問題（書籍類の入手が困難である）⑦牛窓は観光地としてそれなりに整備されつつあるが、東京から牛窓へ宿泊旅行をすると海外旅行ができるぐらいの費用が必要とされるので牛窓はもっと危機感をもつべきである、など面白い意見が多数出され盛況であった。

東京から来たパネリストが東京人からみた牛窓の開発のあり方を論じたという点では大変興味をそそられたが、次回からは京阪神在住のパネリストにも沢山出席してもらいたいと思うのである。なぜなら、牛窓町は京阪神の観光客を対象に町づくりを実践しているのであり、京阪神の人々の意見も沢山聞くような機会も作ってほしいものである。また、会場の総合福祉センターに集まった人々は肝心の牛窓町内の住民は少なかつたように思われる。牛窓町民と町外者の双方が自由に話し合えるような場にするには、あまりにも芸術的、学問的でありすぎ、より実務的、実践的な話題も必要となってくるものではあるまいか。

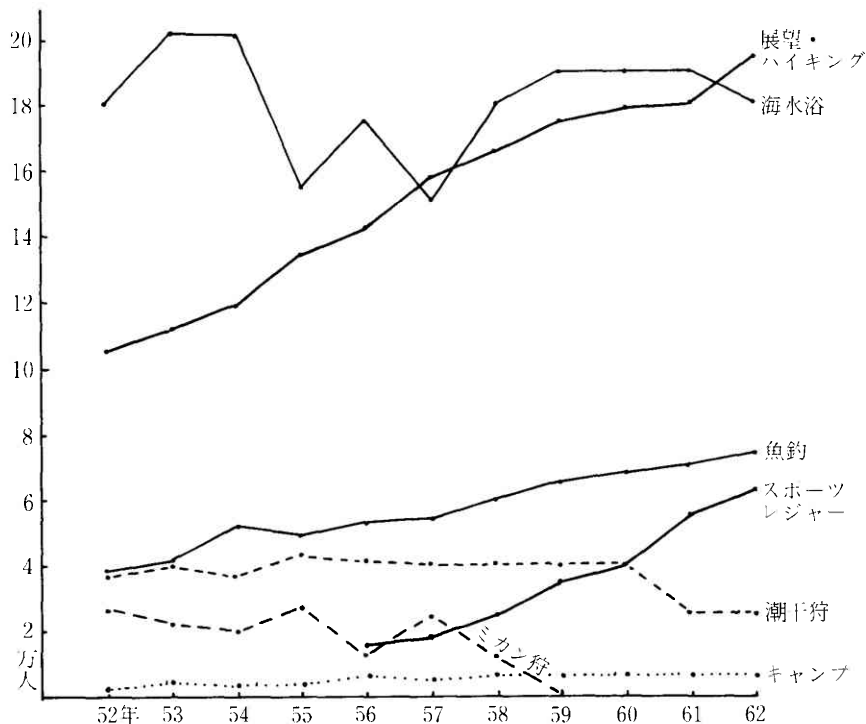
「地方の時代」が叫ばれる今日は、地元の間人が主体性を発揮し、東京などでは思いも及ばないような考え方が出されることを期待したいものである。

ところで、これほど大規模で文化の香り高い「JAPAN牛窓国際芸術祭」が牛窓町で継続的に実施されていることは誠に驚嘆すべきことである。このような催しを町が実行するのではなく、一民間人の出資によって行われていることもまた驚くべき事実である。海外からの芸術作品は、日本に到着してから仕上げるため、渡航費、滞在費など多大な出費が必要となるとの事である。国際芸術祭の初年度には設備投資を含めて1億円、その後は毎年5,000万円ほどの費用がかかるとの事であり、その意気込みと努力によって成り立っているのである。このような町づくりのためのイベントが今後も継続するためには、町当局も資金、組織、企画などの面において民間に頼り切るばかりでなく、より一層の関心を持ち、また援助をしてもらいたいものである。

## 6. 滞在型観光地としての成果と問題点

### (1) 観光客の推移と水泳客の不振

上述のようなイベントの展開が、牛窓町を訪れる観光客にどのような影響を及ぼしたであろうか。まず年間観光客の推移をみると、昭和45年の34万人から62年の60万人まで順調に増加している。観光の種別では、海水浴と展望が多く、続いて魚釣、スポーツ・レジャー



第7図 観光客の推移  
(産業課資料より作成)



一となる。しかし海水浴、潮干狩は過去20年間にほとんど増えず、頭打ちとなっているのに対して、魚釣り、スポーツ・レジャーの伸びが著しい。とくにスポーツ・レジャーは牛窓町におけるイベントの実施が効果をあげているものと思われる（第7図）。

ところで、牛窓町には牛窓・西脇の2つの海水浴場があり、海水浴客の内訳は西脇135,000人、牛窓50,000人となっているが、ここで海水浴客伸び悩みの理由について考えてみよう。

①瀬戸内海の水質汚濁の問題—日本海側の海水浴場と比べて水質が極端に悪い。ペンションのオーナーは、将来は“海を眺めながらプールで泳ぐ”という構想を描いている。

②海水浴場と他の観光関連産業との関係—どちらかと言えば、海水浴場の経営者とペンションの経営者がお互いに牛窓町の発展のために、共存共栄をはかると意識に乏しい面もあり、今後は各部門の経営者が連絡会などを結成し、情報の交換、共同によるPRなどを考えるべきであろう。そして海水浴客が牛窓に滞在しうる方策を検討すべきであると考える。

## (2) 宿泊施設に占めるペンションの地位

ところで、滞在型のリゾート地を目ざして町づくりを進めてきた牛窓町にとって、年間に訪れる観光客のうち、宿泊者の占める割合はどの位のものであろうか。日帰り客よりも宿泊客の方が地元にとって利益になることは言うまでもなかろう。第8表に示したように昭和53年は宿泊客はわずかに26,103人であったが、62年には94,664人にまで増加した。宿泊者の観光客に占める割合は昭和54年までは6%台であったが、ペンション村が形成された56年には11.2%、そして62年には15.8%にまで拡大したのである。

第8表 年間宿泊者数と宿泊施設別シェアの推移

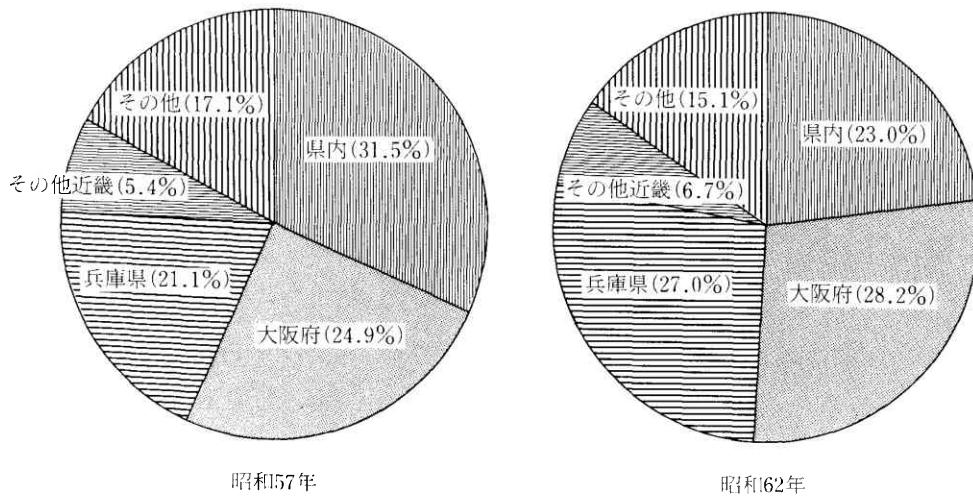
	53年	54	55	56	57	58	59	60	61	62
国民宿舎	12,499人 (47.9%)	13,826 (47.3)	14,581 (35.1)	13,929 (27.0)	13,005 (22.6)	12,837 (19.1)	13,287 (18.1)	12,432 (16.0)	11,632 (13.6)	12,690 (13.4)
旅館・ホテル	4,391 (16.8)	3,892 (13.3)	4,410 (10.6)	6,489 (12.6)	7,958 (13.9)	8,939 (13.3)	10,666 (14.5)	12,137 (15.6)	15,307 (17.8)	17,985 (19.0)
民 宿	9,213 (35.3)	9,545 (32.7)	13,833 (33.3)	18,339 (35.3)	18,864 (32.8)	21,025 (31.3)	21,901 (29.9)	20,812 (26.8)	21,503 (25.1)	23,001 (24.3)
ペンション		1,942 (6.6)	8,672 (20.9)	12,912 (25.0)	17,614 (30.7)	24,468 (36.4)	27,506 (37.5)	32,306 (41.6)	37,349 (43.5)	40,988 (43.3)
計	26,103 (100.0)	29,205 (100.0)	41,496 (100.0)	51,669 (100.0)	57,441 (100.0)	67,296 (100.0)	73,360 (100.0)	77,687 (100.0)	85,791 (100.0)	94,664 (100.0)
宿泊者 全観光客	6.1%	6.5	9.8	11.2	12.2	13.0	13.6	13.9	14.9	15.8

注( )は宿泊施設別シェア

(産業課資料より作成)

また、年間宿泊者を各宿泊施設別にみると昭和52年には国民宿舎が57%のシェアを占めていたが、55年以降はペンションのシェアが伸長し、62年にはそれが43.3%を占有するに至ったのである。すなわち牛窓町における宿泊客の増加は、まさにペンションによってもたらされたと言えるのであり、その意味で、この町づくりは成功をおさめつつあると言えるようである。

観光と文化活動による地域の活性化



第8図 宿泊客の地域別内訳  
(産業課資料より作成)

宿泊施設の地域別シェアをみると、昭和61年には大阪・兵庫を中心とする近畿地方が圧倒的に多く、60%を占める。県内は23.0%であり、大阪への依存度が高い。これを昭和57年と比較すると、県内31.5%、近畿地方51.4%となっており、近年益々大阪方面の観光地としての性格を強めているようである（第8図）。

第9表 宿泊施設別年間単純稼働率

	57年	60	62
国民宿舎	37.8%	33.7	26.7
旅館・ホテル	10.4	11.8	14.9
ペンション	17.4	26.4	22.7
民宿	13.9	13.4	13.0

注、年間稼働率 =  $\frac{\text{宿泊者数}}{\text{年間延収容数}}$  (産業課資料による)

次に各宿泊施設の年間単純稼働率をみることにしよう(第9表)。国民宿舎はほぼ30%以上の稼働率を有しており、宿泊客の人気を集めている(62年に26.7%に低下したのは、改装のため2月に営業を休んだためである)。旅館・ホテルも稼働率を高めている中で、ペンションは62年に稼働率が下がっている。これは、

この年に新たにペンションが2戸営業を開始したことによるが、ここにきてペンションもそろそろ過当競争の段階に突入したように感じられるのである。

第10表 月別宿泊者数と月間単純稼働率

(昭和61年)

	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
国民宿舎	680 (22.4)	468 (15.4)	1,510 (49.8)	909 (30.0)	1,080 (35.6)	725 (23.9)	1,154 (38.0)	2,368 (78.2)	658 (21.7)	808 (26.7)	744 (24.6)	528 (17.4)	11,632人 (31.6%)
旅館・ホテル	820 (8.2)	594 (5.9)	1,191 (11.9)	1,163 (11.6)	1,246 (12.4)	824 (8.2)	1,815 (18.1)	3,208 (32.0)	788 (7.8)	1,015 (10.1)	1,303 (13.0)	1,340 (13.3)	15,307 (14.9)
ペンション	1,485 (12.4)	629 (5.3)	2,908 (24.4)	2,258 (19.0)	3,120 (26.1)	1,809 (15.2)	5,808 (48.6)	10,108 (84.7)	2,997 (25.1)	2,423 (20.3)	2,452 (20.5)	1,362 (11.4)	37,349 (25.7)
民宿	963 (6.4)	738 (4.9)	1,168 (7.7)	1,280 (8.4)	1,556 (10.3)	1,196 (7.9)	2,759 (18.2)	4,034 (26.6)	1,449 (9.6)	1,416 (9.3)	2,101 (13.9)	2,843 (18.8)	21,503 (11.7)
合計	3,948 (9.7)	2,429 (6.0)	6,777 (16.6)	5,610 (13.8)	7,002 (17.2)	4,554 (11.2)	11,536 (28.3)	19,718 (48.4)	5,892 (14.5)	5,662 (13.9)	6,600 (16.2)	6,073 (14.9)	85,791 (18.3)

注、月間単純稼働率 =  $\frac{\text{月間宿泊者数}}{\text{月間延収容数}}$

(産業課資料より作成)

次いで、宿泊客の月別変化をみることにしよう(第10表)。月間稼働率では、国民宿舎とペンションが8月にするどいピークを示すのに対して、旅館・ホテル、民宿は、その傾向は比較的小さい。ことに民宿は宿泊の他に宴会が多く、この表にはあらわれてこない利用者が多いものと思われる。ペンションにおいては、7月と8月の2ヶ月間の宿泊者が年間総宿泊者の42.6%を占めているが、国民宿舎は30.3%、民宿は31.6%となっている。牛窓町のペンションは海浜型観光地の特色を示している。

ところで、ペンションは年間にどれ位の宿泊者があれば採算点に到達できるのだろうか。一般に、昭和40年代に建てられたペンションは、年間に2,500~2,800人程度の宿泊利用者がないと採算がとれないものが多かったが、昭和55年以降のものは従来と同じようにシステマティックに作られたものは、年間に1,800人の利用で損益分岐点に到達できるようになっているといわれている<sup>11)</sup>。牛窓町のペンションの場合も24ベット程度のものが多く、ほぼ基準を満たしているものと思われる。昭和61年には1ペンション当たり2,334人、62年には2,277人の宿泊者があり経営上の採算は十分にとれているものと思われる。

### (3) ペンションと民宿経営の事例

ここでペンションと民宿の具体的な事例を示すことにしよう(第11表)。Aペンションは夫婦2人が主幹労働である。オンシーズンだけは1年間をアルバイトで生計をたてている人を2~3人雇用している。開業当初は最低基準のペンションであったが、宿泊客も少なく、ローン支払に追われ生活も大変苦しかった。しかし経営が軌道に乗り始めた4年後に10室に増築している。宿泊者は京阪神が多く70%を占める。また宿泊者の50%は夏期シーズンに集中する。ただし数年前までは夏には40%程度であったとすることであり、夏期のシェアが高まってきているということである。年間宿泊者は最低水準の2,000人(年間単純稼働率23.8%)となっているが、経営者からの聞き取りによれば、25~30%の稼働率があれば十分に経営が可能であるという。

Aペンションが開設された頃は、ペンションの開業資金は約5,000万円を必要としたが、この内2,000万円以上の借金を抱えていた。最近では7,000万円の資金がなければペンションのオーナーになるのは難しいと言われている。この場合4,000万円が自己資金、3,000万円の借入が安定した経営の条件との事であり、土地を有している人が資産家でない限り、現在では脱サラによるペンション経営はほとんど不可能となりつつある。

そこで参考的に最近新築されたB民宿の場合を紹介しよう。B民宿は昭和61年に新築されたが、外観・内装ともにペンションとほとんど変わらないが、和室が4室あり収容人員もペンションより多くなっている。建物だけで5,500万円を必要としており、土地は法人化している。オーナーは、町外の人であり、夫婦と妹の3人が業務に従事している。2・3月と6月を除いて年間ほぼコンスタントに宿泊客がありオンシーズンには4人を雇用している。B民宿の利用者は宿泊客の他に年間1,500人ほどの宴会客があり、大きな収入源とな

っている。

第11表 宿泊業の経営状況

	Aペンション	B民宿
同居人	夫婦，子供1人	夫婦，妹，子供2人
宿泊開始年	1980年	1986年
オーナー出身地	県外	県内（ただし町外）
施設	10室23名	8室35名
施設の新，増，改築	新築＋増築（4年後）	新築（土地は法人）
開業の為の資金	2,000万円	5,500万円（建物のみ）
オンシーズンのパートタイマー	2～3人	4人
宿泊者居住地	京阪神70%	京阪神70%
曜日別	土曜日80%	土曜日90%以上
季節別	夏季が50%（以前は40%）	6月，2～3月がオフシーズン
宿泊と宴会	宿泊100%	宿泊70%，宴会30%
年間宿泊者	2,000人	3,600人
年間単純稼働率	23.8%	28.2%

（聞き取りによる）

なおペンション村では昭和61年6月ペンション事業協同組合を設立。これはオーナー会から発展したもので、ペンション運営とか村の整備などについて様々のプランを打ち出している。たとえば①プールやテニスコートの建設，②工芸村の誘致，③独自のおみやげの開発，④備品の共同購入，⑤絵葉書の作成，⑥町当局への要望，などである。これに加えてペンション14軒の合同による「牛窓ペンション村祭り」が10月の第1週の土・日曜日に開催されており，独自のイベントや地域振興策を立案し具体化に向けて努力を重ねている。ただしペンションは言うに及ばず，最近新築された民宿もオーナーはすべてが町外者であり，その意味ではまさに町外からの移住者による町づくりとも言える一面も有しているのである。

#### （4）観光客の増加と牛窓町の商業

牛窓町では観光客が増加しているにもかかわらず，それを相手とした商業は非常に少ない。ペンションが誘致された昭和54年と現在の商業の実体を比較したものが第12表である。この間に観光客は12.6万人増加しているのに，商業施設は店数，従業員数ともに減少しており，不振とも形容できる状態である。ことに町内には飲食店が少なく，京阪神からの観光客のニーズに十分対応できないのが現状である。観光・娯楽施設の充実とともに，魅力ある商店街の形成が急務の課題となっている。町内の人々の意識の変革も必要となってきたのである。

第12表 牛窓町における商業の変化

		昭54			昭61		
		店数	従業者数	年間販売額	店数	従業者数	年間販売額
一般卸売業		16店	61人	110,672万円	13	54	87,367
小 売 業	織物・衣服、身のまわり品	17	39	28,130	16	39	32,725
	飲食料品	85	203	135,540	77	175	161,439
	飲食店	26	65	14,599	28	72	25,261
	自転車・自動車	4	8	6,265	6	17	14,856
	家具・建具	20	46	34,233	14	32	28,243
	その他	49	126	88,604	53	136	146,608
	小計	201	487	307,371	194	471	409,132
合計	217	548	418,043	207	525	496,499	

(岡山県商業統計調査表による)

## 7. おわりに

牛窓町は地域の活性化に対して、最初は行政の側がいくつかの補助事業を活用しながら基盤の整備に努め、それとともにペンション村の誘致、ギリシャとの姉妹都市縁組、ふるさと会員制度など、そのきっかけを作ることに成功した。しかし、その後の町づくりについては、ほとんどを民間の力に依存することになった。ただし、県外の大型資本の進出による開発ではなく、ペンション村のオーナー、地元の資本による個性ある、粘り強い、そして格調高い町づくり運動へと発展しつつある。

しかしながら、町づくり運動が、マスコミなどによって紹介されることによって、世間の注目を集めるところとなったが、その内容との間には、いささかのズレが生じていることもまた事実である。そこで牛窓町の町づくりについて、現在かかえている問題点、ならびに今後に残された課題について、若干の検討を加えることによって、結びにかえることにしたい。

- ①町づくりを推進する明確な母体が存在しないため、行政と民間の間の連絡が密でなく、各種のイベントなどが単発的に催されることになり、相乗的な効果を発揮し難いように感ぜられる。
- ②P.Rが先行しすぎ、観光地としての体裁が未整備であり、観光客が2～3日滞在する施設や商店の魅力に乏しい。
- ③ペンション村のオーナー達（町外からの移住者）と町内居住者との間には、必ずしも地域の経営について理念を同じくしておらず、ズレ違いが見られる。町外者の方が発想が大胆であり、意欲的であるが、町内居住者はどちらかと言えば保守的であり、健全な町の発展のためには両者の融和が望まれる次第である。
- ④農漁業を中心とする牛窓町民は、基本的には大変裕福であり、地域経営に対してそれほど切迫感をもっていない面も見受けられるのであり、それがいま少しもり上りに欠

ける原因の一つとも考えられる。

- ⑤牛窓町役場は、芸術祭をはじめとする各種イベントについて、民間主導型をうたっているが、行政と民間、町外者と町内者の関係の調整、自然景観の保護など、たとえば、岩手県の田野畑村などのように<sup>12)</sup>、もう少しリーダーシップを発揮し、組織化の要となる努力をするべき時期に来ているように思われる。そのためにも、第三セクター方式による地域の活性化など、行政としての目ざす方向を明確にするべきではなかろうか。
- ⑥芸術祭、ギリシャ・セミナーなど格調高い町づくりを進めている牛窓町は、観光+1.5次産業による地域の振興のほかに、文化的産業の育成に取り組む必要があるように思われる。またこれまで、京阪神を中心とする不特定多数の観光客を対象に町づくりを進めてきたが、今後は都市部の企業、団体などと提携したイベントや交流事業なども一考の余地がありそうである。レジャーランド化をさけるためにも、ユニークな催しと文化的諸施設の充実に努め、地方の文化センターとして、情報発信基地としてのさらなる役割を期待するものである。

本稿作成にあたり、大手前女子大学衣笠茂教授に御助言いただいた。また調査に際して、牛窓町の方々に大変お世話になった。厚く御礼申し上げたい。

〔注〕

- 1) 小森星児「地域開発と国土計画」、末尾至行・橋本征治編『人文地理』大明堂、1988。
- 2) 高橋正明「都市と農村の交流による地域の活性化—岡山県鏡野町の場合—」大手前女子大学論集18、1986。  
高橋正明「兵庫県における都市農村交流事業について」大手前女子短期大学研究集録、1986。  
高橋正明「農山村における地域の活性化」、末尾他編『人文地理』大明堂、1988。
- 3) ベルギーでは過疎山村で、古本屋を中心とする地域活性化の例が報告されている。「Belgian Village Turns a Page to Economic Rebirth」International Herald Tribune, Hong Kong, Monday, June 22, 1987。
- 4) 刈屋栄昌『牛窓風土物語』
- 5) D. M. Smith『Where the Grass is Greener : Living in an Unequal World』,竹内啓一監訳『不平等の地理学』古今書院
- 6) J. C. Weaver「Crop-combination Regions in the Middle West」The Geographical Review 44, 1954。  
J. T. Coppock「Crop, Livestock and Enterprise Combinations in England and Wales, Economic Geography,40, 1964。  
上井喜久一「ウイバーの組み合わせ分析法の再検討と修正」人文地理22-5, 1970。
- 7) 寒風陶芸会館の案内書による。
- 8) 中小企業庁小規模サービス業振興室『ペンション経営の現状』1983。
- 9) 高橋正明（前掲2）。
- 10) JAPAN牛窓国際芸術祭実行委員会の案内書による。
- 11) 中小企業庁（前掲8）
- 12) 伊藤勝身『田野畑村の実験—地域開発マネジメントに生きる—』総合労働研究所、1984。